2023. 7. 23 礼拝説教（土浦めぐみ教会）「命を惜しむ神」

ヨナ書 3:10 - 4:11

浜田師

導入）ブラジル宣教師の浜田献です。2012 年 10 月にブラジルに派遣されてから、間もなく満 11 年を迎える。これまでの皆様の尊いお祈りとご支援を心から感謝申し上げる。今朝はこのような貴重な機会をいただき感謝。先日、私は聖書翻訳の訓練をする施設でお手伝いする機会があったが、ブラジルにもまだ聖書を持たない多くの先住民族が存在することを改めて知った。5 月にはサッカー伝道の研修を受けたが、スラム街の子どもたちにサッカーを通して果敢に伝道しているグループの話を伺い、宣教の情熱をもう一度教えられた。今朝は、ヨナ書を通して「宣教のスピリット（情熱）」について主の御声を聞きたい。

1. ヨナの召命と宣教（1-3 章）

ヨナは神から「ニネベに行って宣教せよ」との御声を聞くが、それとは反対方向の船に乗り込んだ。「主の御顔を避けて」神から逃げた。ヨナはニネベには行きたくなかった。ニネベが邪悪なアッシリアの町で、北からイスラエルを脅かす敵国であったから。ヨナは、神の御声をしりぞけて、国外逃亡を試みた。しかし、ヨナが乗った船は間もなく嵐に遭い難破しそうになる。船員たちは一向に治まらない嵐を見て「だれのせいでこの災いが起きたのか、くじを引こう」と言い出す。そして、そのくじは見事ヨナに当たった。ヨナは、自分が真の神から逃げてきたことを語り、自分を海に投げ込めば嵐は止むだろうと語る。そこで船員たちは止むなくヨナを海に投げ込むんだ。すると嵐は止み、海は凪になった。これを見た船員たちは主に立ち返った。1:16「人々は非常に主を恐れ、主にいけにえを献げて誓願を立てた。」

そのとき、ヨナは海の藻屑となって息絶えるところだったが、ヨナは巨大な魚に飲み込まれ一命を取り留めた。魚の腹の中で三日三晩生き延びたヨナは、陸地に吐き出されて生還する。ヨナ書 2 章には、ヨナの祈りが記録されている。2:9「しかし私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえを献げ、私の誓いを果たします。救いは主のものです。」ヨナは、人の救いは主のもので、ただ主の恵みとあわれみによって自分は救われたとの告白に導かれた。

生還したヨナは、再び主の御声を聞いた。3:2「立ってあの大きな都ニネベに行き、わたしがあなたに伝える宣言をせよ」と。ヨナは今度はまっすぐにニネベに向かった。そしてニネベの町を歩き回って叫び続けた。3:4「あと 40 日すると、ニネベは滅びる」。実に単純明快な滅びのメッセージ、何の飾り気もない大胆な宣言だった。しかしその言葉は、真実に、衝撃をもってニネベの人々の心を捉えた。3:5「すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで粗布をまとった」。「流血の町」（ナホム 3:1）と言われるほどの邪悪な町ニネベが、ヨナの説教によって悔い改めた。

ヨナ自身、あの大海原の死の淵から救われ、一寸のところで滅びを免れた者だった。だからこそ、そのヨナの語る「滅び」の説教に、ニネベの人々は心捕らえられ、神の前における真摯な悔い改めが起こったのかもしれない。

ヨナにとっては、一度は死んだも同然の自分だった。もはや失うものは何もない。自分の失敗や愚かささえも武器にして、捨て身で叫び続けるヨナだったのではないか。「あと 40 日すると、ニネベは滅びる」。

この「滅びる」という言葉は、「くつがえる、立ち返る」とも訳せる言葉。すなわち、ヨナはニネベの「滅び」を語りながら、実は、ニネベが神の前に「立ち返る」ことをも語らせられていたのかもしれない。そして、邪悪な町、流血の町ニネベは、実際に神の前に立ち返り、滅びを免れた。

ヨナはニネベの人々の救いを大いに喜び、自国イスラエルに帰って行った…と話が終わってもよかった。しかし、ニネベの救いは、逆にヨナを不愉快にさせ、怒りさえ引き起こした。ヨナ書4章は、このヨナの怒りから始まる。

2. ヨナの怒りと神の御心（４章）

ヨナはどうして不愉快になり、怒ったのか。ヨナはなぜニネベの救いを喜べなかったのか。
4:2「ああ、主よ。私がまだ国にいたときに、このことを申し上げたではありませんか。それで、私は初めタルシシュへ逃れようとしたのです。あなたが情け深くあわれみ深い神であり、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直される方であることを知っていたからです。ですから、主よ、どうか今、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましです。」

端的にいうならば、ヨナは、神がニネベをあわれみ赦されたことに嫉妬し、ねたんだ。ヨナはどこかで、正義の神がニネベの悪を罰し、正しい裁きをしてくださるにちがいないと期待していた。しかし自分の期待に反し、ニネベが悔い改め、神の救いを得た。納得のいかないヨナは、なお町の東に方に出て、仮小屋を作り、そこから「高見の見物」とばかりに町の様子を眺めることにした。

神は絶対にあんな邪悪な町ニネベを赦されるはずがない。もしかしたら神が思い直して、再びニネベを滅ぼすかもしれないと期待したのかもしれない。ヨナにとってニネベは観察の対象にしかすぎなかった。ヨナ自身はあれほどの救いを経験したのに、ニネベの救いに関してはどこか他人事であった。ヨナは、世界大の神の愛や救いのご計画を、自分の狭い基準や物差しで小さく見積もってしまっていた。「あんな人々やあんな国は、神の裁きに会うべきた」と勝手にさばき切り捨ててしまう。あるいは、「あのような人々は、私には関係ない」と最初から関わりを持とうとしない。私たちは、意識的に、無意識的にさげすみ、遠ざけ、祈ることさえ止めてしまっている人々がいるのではないだろうか。

神は、ヨナの怒りと不機嫌を直そうと、一本の「唐胡麻」を用意され、仮小屋を覆う日陰を下さった。ヨナはそれを非常に喜んだ。ささいな唐胡麻の日陰だったが、ヨナの機嫌を直すには十分だった。「やっぱり神は私を愛し、私の味方でおられる」と感じたのではないか。しかし、翌日その唐胡麻の葉は、一匹の虫にかまれ、枯れ果てる。ヨナは再び「元の木阿弥」に戻ってしまう。
4:8）「太陽が昇ったとき、神は焼けつくような東風を備えられた。太陽がヨナの頭に照りつけたので、彼は弱り果て、自分の死を願って言った。『私は生きているより死んだほうがましだ。』」

昨日まで、あんなに喜んでいたヨナが、ささいな唐胡麻一本で、変わり果ててしまう。あまりにも感情的で愚かに見えるヨナ…。しかし、これが私たちの現実の姿ではないだろうか。私たちもまた、ささいな事柄で一喜一憂してしまう。すべては神が与えてくださった賜物であるのに、それが取り去られると怒り、不満を漏らす。荒野を旅した神の民も同じだった。「ここにはパンも水もない。エジプトにはうまい肉や魚があった。野菜や果物もたくさんあったではないか。なのに今はこの惨めなマナしかない…」
私たち人間は、生活や環境の変化に実に弱い存在だ。ヨブのように「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」（ヨブ 1:21）とはなかなか言えない。むしろ現実の痛みや悲しみに沈み込み、神と人を呪って生きるような愚かなものかもしれない。

ヨナは、神の前に二度も怒りを爆発させたが、神はそのヨナに対して二度同じ言葉で問いかけている。4:4、4:9「あなたは当然であるかのように怒るのか。」あなたのその怒りは本当に正しいのか。あなたの怒りはどこから来ているのか。神はヨナの心の内を探っている。ヨナは、自分が怒るのは当然だと答える。神は、ヨナの怒りをじっくりと受け止めながらも、最後にご自身の思いを語って、この書を閉じている。

4:9-10「主は言われた。『あなたは自分で労さず、育てもせず、一夜で生えて一夜で滅びたこの唐胡麻を惜しんでいる。ましてわたしは、この大きな都ニネベを惜しまないでいられるだろうか。そこには、右も左も分からない 12 万人以上の人間と、数多くるではないか』」

ヨナは、日陰を与えてくれる「唐胡麻」をことさらに喜び、ことさらに惜しんだ。自分で育てもしなかった唐胡麻なのに…。ヨナは非常に狭い視野の中で生きていたのかもしれない。イスラエル民族の祝福と、唐胡麻のあるような快適な生活、それがヨナにとってのすべてであったかもしれない。しかし神は、預言者ヨナを、もっと広い豊かな世界へ連れ出そうとしている。

「ヨナよ、あなたがその唐胡麻を惜しんでいるように、神であるわたしは、この大きな町ニネベを惜しんでいる。この町には、あなたと同じ「命」をもった人間と家畜が多く残されている。彼らもまた、わたしが愛する命であり、わたしが創造した一人ひとりなのだ。彼らが、わたしから遠く離れて滅びていくことを、私は決して願っていない。わたしは、彼らが立ち返って生きることを何よりも願っているからだ」

神はヨナを、神ご自身の視点に招き、神ご自身の御心を知って欲しいと願っておられる。

「ヨナよ、あなたはいったい何を惜しんでいるのか。あなたの関心はいったいどこに向いているのか。」

だれもが「惜しむ気持ち」を持っている。神は、その惜しむ気持ちを責めているのではない。私たちの周りには大切なものがあり、大切な人がたくさんいる。しかし、私たちの視野はときに狭く、ときに自己中心に陥りやすい。もっともっとその存在を惜しみ、とりなすべき命があるのではないか。

私たちには、向かうべきニネベがある。しかし、そこに十分な関心や祈りが向かない視野の狭さや無関心がある。「現代の唐胡麻」は、実に巧みに私たちの心を喜ばせ、そこに留まることだけに執着させようとする。そしてもはや、現代的なニネベは存在しないかのような錯覚を与え、教会から宣教の情熱を奪っていく。私たちは、主イエスが眺めておられる霊的現実に目を開かれる必要がある。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから収穫の主に、働き手を送ってくださるように祈りなさい」（マタイ 9:37-38）。

全世界の命を惜しむ神が、全世界に出ていき、すべての造られた者に福音を宣べ伝えよと命じられた。教会はこの使命に立って、主が来られる日まで、全世界に福音を証しし続けるのだ。全世界は、外国に行くことだけではない。全世界は、私たちの足下に広がっている。さあ、私たちにとってのニネベに出て行こう。